

韓国忠南大学留学報告書 2011/2/10

200911729 M2 高橋恵理矢

<日程>

2010年8月7日(土)～8月23日(月)

<場所>

韓国、忠南大学校 宝雲キャンパス(大田広域市中区文化洞6)

<概要>

筑波大学と忠南大学との医学の交換留学協定により、ここ数年は毎年韓国から2名の留学生在筑波大学に来ており、学生サークル筑波医学生国際交流連盟(TIMSA)が受け入れ業務を行っていた。2010年度の1月には新設の医学インターナショナルオフィスとTIMSAとの連携の下に2名の留学生を受け入れた。

そのような中、今回初めて筑波大学からM4福田俊輔とM2高橋恵理矢(私)が交換留学生として忠南大学で学ぶ機会を得た。私はまだ学年がM2であり、臨床のコースを受けていないため、基礎系の研究室で実習することになった。約2週間のうち1週目は免疫学、2週目は病理学の研究室にお世話になった。

<一週目(8/9～8/13):免疫学教室 教授:Dr. Jo>

一週間目はDr. Joという免疫学の教授のもとで実験をさせて頂いた。Dr. Joは女性で、忠南大学(医学部?)史上、最速で教授になった方らしく、何かのセンターのセンター長でもあるそうで、かなり優秀な方だった。一方で、人格も素晴らしくとても親切で、忠南大学の生徒たちからの人望も厚いようだった。

私はDr. Joから以下の課題を与えられた。この課題をもとに、研究室の大学院生から細胞の培養法やELISA法、FACSなど基礎的なことを教わった。

Project: Mycobacterial Antigen Heparin-Binding-Hemagglutinin Induces Intercellular Adhesion Molecule-1 Expression in Pulmonary Epithelial Cells through a Reactive Oxygen Species.

Main questions:

- 1) Can this HBHA antigen induce ICAM-1 expression?
- 2) Can this HBHA antigen induce ROS generation?
- 3) Will HBHA-mediated ROS play an important role in ICAM-1 expression and STAT-1 activation?

研究の世界が初めてだった私には、与えられた課題の内容を理解するのが最初のハードルだった。課題の意義や分からない点は周りの研究員に聞いたり、インターネットで調べたりした。また、Dr. Joや周りの研究員たちは私にたくさんの論文を渡してくれたが、当然中身は英語でしかも学術用語だらけで英和辞書も全く役に立たず、インターネットや推測でそれらの論文と格闘する日々だった。

大学院生に教わりながら実験は進み、最終日にはデータを出すことができた。このデータの内容が新しいものなのかどうかは定かではないが、5日間という短い期間で一定の結果を出すことが出来たので、充実感があつた。これもDr. Joの課題の設定が適切だったからだと思う。

Dr. Joの研究室では多くの方が親切に声をかけてくれたり、助けてくれたのでとても居心地がよく、有意義な時間だった。友人もたくさんできたので、またいつの日会える日が楽しみである。

<二週目:病理学教室 教授:Dr. Lee>

二週間目は忠南大学医学部の学部長である、Dr. Leeの研究室にお世話になった。Dr. Leeはその役職からかとても忙しい方で、私はその研究室のポスドクのもとで研究の見学をした。

一週目の研究室がかなり忙しかったせいか、病理学の研究室はとてもゆったりとしていて、特に課題もなく、ポスドクの方の細胞培養や蛍光顕微鏡などを見学させて頂いたものの、少し手持無沙汰だった。せっかく韓国まで来たのだからと、秘書を通してDr. Leeに相談し、途中から附属病院の見学に変更して頂いた。

附属病院では計3日間過ごした。1日目、2日目は病理診断の部屋で、レジデントの医者が100を超える検体をまな板の上で細かく切り、標本作製用のプラスチックケースに乗せていく作業をひたすら隣で見学した。毎日4、5時間立ちっぱなしだったので大変だったが、レジデントが親切に検体の解説をしてくれたので、退屈はしなかった。摘出した胆嚢や、双子の胎盤、腫瘍の付いた大腸などありとあらゆる検体が次々と現れて、レジデントはそれを慣れた手つきで次々と標本にしていっていった。手術で摘出されたそれらの検体には、患者の予後を決める重要な情報が含まれており、ひとつひとつの検体ごとに病める存在としての人間の側面を考えさせられた。

3日目は希望していた外科手術を見学させて頂いた。2年生でまだ臨床コースが始まっていない中で、手術見学だったので、そのとき見ている疾患がどのようなものなのか、詳しくは分からなかった。記憶にあるのは脊髄に発生した拳大の腫瘍と、漏斗胸の手術である。手術室に入るのはその時が初めてだったので、とても緊張したが、周りの学生の雰囲気を見ると慣れた感じだったので、割と慣れるものなのかと思った。その学生たちは5年生で、臨床実習のローテートでたまたま同じドクターについており、とても話やすく、今見ている疾患について一生懸命説明してくれた。休憩室で一緒にお菓子を食べたり、写真を撮ったりして仲良くなることが出来た。

<その他、生活や観光など>

韓国留学中は医学5年生の学生の部屋に先輩と二人でホームステイをした。その学生は韓国のインターナショナルスクールの出身であり、とても自然な英語で分かりやすかった。性格も明るく、とても親切で毎晩のように語り合った。中国系韓国人であることもあり、韓国にいながら中国の文化や考え方にも触れる事が出来た。

観光については、留学してきた学生向けに、大学から留学生を世話する学生にクレジットカードが貸し出されており、観光の際の交通費や食事代は一緒に行った韓国の学生も含めてほぼ全て大学側が負担していた。これが筑波大とは大きく異なるところだった。また、観光に行く学生もほぼ全てが5年生であり、臨床実習の忙しい合間をぬって食事や観光に付き合ってくれた。

英語に関しては、韓国の方が英語を使える人が多い気がした。英語に対する苦手意識は日本のそれと対して変わらないが、忠南大学ではTOFELの成績によって授業料を免除するシステムがあったり、一部では英語の教科書を使っており、日本とは状況が少し違っていた。ただ、英語の教科書を使うことに関しては、韓国語で医学単語を表すことが完全には出来ないらしく、そういった母国語の性質の違いもあるのかも知れない。また、本屋に立ち寄ってみると、英語の教材コーナーが日本に比べて大きく、韓国人たちがいかに英語に関心をもっているかをうかがい知ることが出来た。

<最後に>

韓国で学んだ研究の基礎的なことや、韓国の医学生たちの様子は今でも印象的に記憶に残っており、2週間という短い期間だったにも関わらず、非常に大きな経験が出来、医学生としての視野を広げる事ができた。今後も大学の支援のもと、筑波大学と忠南大学や他の外国の大学との学生の行き来があると、より広い視野を持った医者や研究者を育成できると思う。学部同士の連携が今は少ないが、さらに増えると良いのではないだろうか。

